神奈川新聞社主催、ネクスコ東日本、ネクスコ中日本協賛

「道の作文コンクール2019」

受賞作品

中学生 神奈川新聞社賞

相州大山に思いを馳せる

聖園女学院中学校1年　小泉　晶絵

私は夏休みに落語の「大山詣り」を聞いた。それは、江戸の庶民が木太刀を持って大山に参拝をする小旅行の話で、落ちは「みなさんお怪我（毛が）無くてお幸せ。」という笑い話だ。個性豊かな登場人物が生き生きと語られて面白かった。でも私は落語より大山道や大山信仰に興味を持った。電車もバスもない時代に、年間約二十万人を超える人が歩いたという大山道を、私も歩いてみたいと思った。落語の大山道は今の赤坂あたりから大山を目指す話だが、私には時間がなく、体力にも自信がないので、大山のふもとから挑戦することにした。

はじめは三六二段の「こま参道」だ。こまタイルのこまの数が踊り場の場所を表していて、道の両側の豆腐料理やこま屋の店を見ながら歩くのがとても楽しい道だ。次にケーブルカーで阿夫利神社下社へ行き、登山祈願をして登拝門を通った。そして、急な階段を上ると登山道となった。登山道には道しるべとなる石柱が二十八あり、その石柱を目印に登っていく。歩き始めて間もなく全身が重くなってきた。母は大汗をかきながら「ダイエットになる。」と笑ったが、笑いごとではない。日かげのすべりやすい道にわざわざ転がっている意地悪な石や、偉そうにしている巨石。「山頂からの景色は一望千里だよ。」と私をはげます父の言葉は、全く信じられなかった。でも八丁目の「夫婦杉」や十五丁目の「天狗の鼻突き石」など、疲れた時に立ち止まって見学をすると、少しほっとした。二十五丁目のヤビツ峠からの道との合流地点で「山頂まで二百メートル」の看板を見つけた。最後の登り坂だ。私はありったけの力を出そうと思い、腕を振って歩いた。そして、私はついに大山山頂（一、二五二メートル）に立つことができた。

これが一望千里か…山頂の鳥居をくぐった道をぬけて、すがすがしい風を感じながら私は思った。大山下社からの登山道は、予想以上に急な坂道ばかりで辛かった。思い通りに歩けなくて、ガイドブックにのっている二倍以上の時間をかけてやっと山頂にたどり着いた。でも、山頂からの景色を見ていると心のモヤが晴れるようで、あきらめずに歩いて良かったと思う。江戸時代の大山参りに行った人たちも、私と同じ道を歩いて、同じ木を見てきたのだろう。きっと、山頂に着いたときの私と同じ満足も味わったと思う。私は昔と変わらない道を歩いてみて、大山にあこがれた江戸時代の人々の意志を共有できた事が、とても嬉しい。

2020年（令和2年）3月30日　月曜日　8面・9面　企画特集より

※神奈川新聞社に無断で転載することを禁じます。